
線香花火 ひと夏の思い出

ゆぐ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

線香花火　ひと夏の思い出

【Nコード】

N7944A

【作者名】

ゆぐ

【あらすじ】

平凡だった中学生生活。その分、やってきた高校生活は新鮮で楽しかった。そして初めてやってきてた夏休み。僕に恋の風鈴は鳴るのか!?

第1章 訪れる夏休み（前書き）

夏休みということで、今日次を少しお休みして中編小説（？）を發表します。

今日次も連載中なので5話以内に収めるつもりではありません。楽しんでいただければ幸いです。

第1章 訪れる夏休み

線香花火か、懐かしいな…。

僕は夜の堤防を歩きながら思った。

今日は僕の町で年に一回ある夏祭りの日だ。

普段は寂しい感じのする町だが、今日だけは違う。

家々の明かりはもちろん、こういった堤防までがにぎやかになる。

僕はこれでこの祭りを迎えるのは、25回目になる。

そう、このお祭りで、その年以降そのことを毎年思い出さずにはいられない年があった。

僕が、高校に入っただけの年にあつたお祭り。

16回目のお祭りだ。

「蒼！明日の祭り一緒に行こうぜ！」

「おお、俺も行く！」

「おっし、じゃあ3人で行くか」

僕の名前は“葉夏 蒼”

県内でもトップクラスの（自分で言うのもなんだが）進学校『星楽学園』に入学できた。

中学からの成績もよくて、ずっと狙っていた高校だったので合格が分かったときは、ものすごく嬉しかった。

どうせ真面目なやつばかりだろ…。と思っていたクラスメートも、

とてもノリがよくて面白い二人に出会えて高校生活を楽しませる要因の一つになっている。

最初に話しかけてきた奴が、“風堂 秀太”

いかにも凄そうな感じのする名前で本人曰く「星楽なんて、誰でも受かるだろ？俺でも勉強なんてほとんどしてないぜ？」らしい…。

ちなみに僕は中学1年の時から猛勉強していたのに、あまりにあつさり言われてしまい、ちょっぴり恥ずかしくなって、ここにはそん

な奴ばかりなのか？と、焦ったものだ。

俺も行く…と言ったのは“笠原 篤希”^{かさハラ あつき}彼はなかなか努力家だったらしくそこそこ苦労して入学したそうだ。

ただ、彼も裏があり、先生に勉強で喧嘩を売られ（本人談）それで逆上して、勉強して受かったいう。なんとも素敵な話だ。

こんなノリのいい二人だから学校も楽しい。勉強が辛くても苦にならない。

「おー、そこはもう夏休みモードかあ！宿題忘れんなよ！秀太！」

「何言ってるんだよ！俺は宿題なんかしなくても余裕なのー！」

そう言って、秀太は先生の突込みをうまくかわし、みんなを笑わせた。

もちろん、クラスの間みなともお互い仲がいい。

受験の競争相手という感覚はなく、お互いに励ましあうような存在だ。

やはり、友達というのはこうでなくては…と、常々に思ってしまう。何故なら、僕がいた中学校は3年の後期に入るとお互いに口も聞かなくなり、分からない所を聞くとしても「うっせえな！先生に聞けばいいだろ！」と逆ギレされた。

もち、高校に進学しない奴はいた。そいつは最初は騒いでいたがクラスの雰囲気気圧され、結局は静かになってしまふ…という凄惨状況だったわけだ。

「よーし、それじゃあ今日はここまでだ。夏休み中もだらけちゃいかんぞ！宿題はもちろんのこと、課外にも積極的に参加するように！」

キーン、コーン、カーン、コーン…。

先生がちょうど言い終えたときチャイムが鳴った。

「よし、日直号令！」

「きりーつ。れい！」

日直の秀太のやる気のない声は、さきほどの先生の声とのギャップもあり、いっそうやる気なく聞こえた。

クラスみんなは、一緒に下校する子同士が誘い合って教室を出て行った。

「なあ…夏休み中にほしいよな？」

静かな並木道を僕たち3人が歩いているとき、秀太が口を開いた。

「何が？」

「決まってんじゃん！なあ篤希？」

ここで、なにか分からない僕はむっとした。

「俺はもういるけどね」

そっけなく、篤希が答えた。

「え？うつそ、マジで！？」

「じょーだん！いるわけないっしょ！」

「は、はめたな〜！」

2人が勝手に盛り上がってるのが悔しくて、僕は大きな声で言った。

「もう！いったい、なんの話してるの！？」

「お？蒼はまだ気づかないのか？冗談だろ？彼女だよ。か・の・じよ！」

感づいていながらも僕が一番避けてほしい話題だった。

彼女、恋愛、交際…。そのどれからも僕は無縁だった。

いや、自分から避けていたというほうが正しいだろう。

先ほども話したとおり、僕の学校はみんなが受験に必死だった。だから、僕も自然とそれらから離れていった。だが、みんながみんな

“付き合ってたなかった”という嘘になる。と、いうか嘘だ。付き合っているグループは僕が知っているだけで、結構あった。

そう考えるとやっぱり自分から避けていたと考えるほうが正しいだろう。

なんでだろう。やっぱり、僕には刺激が強すぎたのだ。

男女で付き合うつて…、考えただけでも背中がむずむずしてくる。

ここは進学校だったので、そんな話題は一切ないと思った。

だが、その考えは甘かったのだ。人類永遠のテーマといってもよい

恋愛を高校でしないのはおかしいと…やはりそういうことなのか。ただ、この二人のことを僕は大好きだったので、できるだけ話しを合わせることにした。

「ああ、彼女ね…、僕もほしいなあ！」

「お、蒼もそう思うか？誰がいいんだよ？クラスの中で」

…！予想外の展開になった。ここで好きな人を言わされる羽目になるとは…。

まあ、でも好きな人というのは悪くない。自分の趣味が合うかどうか、確認できるし、万が一、両思いだつて時は…。

いやいや、考えすぎだ…。

そう、別に僕は恋愛が嫌いなわけではない。彼女が要らないわけではない。

ただ、刺激が強いというだけであつて可能であれば高校生活中に経験するのも悪くはない。

と、段々僕の思考回路が変わってくる。

恐らくは…この二人の影響だろう。

この二人が僕をこれだけ変えているのかと思うと、少し嬉しい気持ちと少し不安な気持ちになった。

「ん…とね、“水月優菜”さん…」

「おお…なかなかいい目してるじゃん！俺もあいつはクラスの中でいいほうだと思うぜ！」

「うん、俺もいいほうと思う」

二人が賛成してくれたので、僕は嬉しくなった。

「そうだよね！？可愛いし、優しいし！」

「まあ、頑張れよ！篤希は誰だよ？」

話が篤希にふられた。篤希は見た目がとても格好いい。制服をラフに着こなし髪型もきれいになびかせている。顔立ちも整ってきれいだ。

「んー、俺？俺は同じクラスにはいないなあ…、秀太は？」

秀太もなんだかんだ言つて、女子に人気がありそうなタイプだ。ト

「クも面白いし、顔も悪くない。美形ではないが女性を惹きつけそうな顔だ。」

そう、考えると、自分が一番情けないような感じた。

「俺もかな。っていうか、同じ学校じゃなくて前駅で会った子が忘れられないんだよな」

「なんだよ、それー、名前も分かんないんじゃないんじゃ駄目だろー？」

「いや、夏休み中に会ってメルアド聞き出す！」

「夏休み中にはって…その子も学校休みじゃん」

篤希のするどい追い込み方に秀太は、あ…と口を開いてしまった。

そして、僕も篤希も大声で笑った。

笑うなよ！と言いながらも秀太も笑っていた。

こんな何気ない日常が楽しかった。ただ、みんなで話して笑いあっていた…。

友達がこんなにいいものなんて、今まで気づかなかった自分はどうかしてた。

でも、これが当たり前なのだ。一緒にいて楽しいから友達なんだろう。

彼らは…僕にとって生涯初めての友達だ。

そして、もう一つ…。

明日から、高校生活初めての夏休みだ！

第2章 光る夏と淡い恋（前書き）

えー、更新遅いですね。

意外に夏休みが忙しいのです（苦笑）

第2章 光る夏と淡い恋

チリチリチリ…！

容赦ない音が響き渡る。

「んつと、何時だ…？」

そして目覚まし時計を見てから気がついた。

「今日から夏休みだった…じゃん」

夏休みの訪れにも気づかず目覚まし時計をセットしてしまうとは…、なんとドジな事か。

しかし、安眠を妨害されたことより、夏休みの初日に早起きした自分が嬉しかった。

「今日はお祭りだし、何かいいことがおきそうな予感…」

そんなことを考えながら、僕は布団から這い上がった。

「おはようー」

「え！？蒼？今日から夏休みなのよ？早起きなんて！」

やはり、母も驚きを隠せないみたいだった。

しかし、僕は目覚まし時計のことは黙っておこうと思った。

「うん、なんか夏休みの初日に早起きするといい生活リズムが作れそうじゃん？」

と、心にもないことを言っておいた。

母は軽く微笑し、僕の朝食の支度をする足早に仕事へと駆けていった。

「今日はお祭りまで、どうやって過ごそうかなあ…」

僕はトーストを口にほおばりながら、目を宙にやり考えた。

宿題か？いや、やっぱりやる気が出ないな。

もう一回寝る？どう考えても、ナンセンス。

ゲームしようか？なんかなあ…。

と、途方もなくなるような考えを僕は脳内で張り巡らした。

そして、食後のコーヒーを口に含んだとき、答えなんか出てこないなという答えに辿り着いた。

僕の夏休みの快進撃もここまでだった。

食事を終え、僕は2階へと上がった。

なにか蒸し暑いと思ったら、窓が閉まっていたので、僕は急いで窓を全快に放った。

一筋、二筋、三筋　数え切れない風が僕の頬を撫でた。

「気持ちいいー！」

僕は、大声で叫んだ。

夏休みの色合いが、空気にも浸透し僕を歓迎してくれるかのよう。

外ではセミの鳴き声が聞こえ、並木道の葉も心なしか昨日より鮮やかな緑をつけているように見える。

空は、雲ひとつない青空。

僕の小さな憂鬱は、神々しい何かによってかき消された。

僕はベットに大の字になった。

すると、水月さんに初めて“感情”を抱いた日のことを思い出した。

あれは…忘れもしない入学後の委員会を決める学級会。

僕は、特に何もやりたいことがないので拳手もせずぼーっとしていた。

しかし、途中で先生が「まだなににも立候補してない奴ー？残り物になるぞー！」と言ったので、僕は慌てて前を向いた。

ん？係りの数は1、2、3、4…あれは5人だから×5で11、12…39、40人分…。いやいや、うちのクラスは40人だ。

僕の数え間違いだ…。もう一度数えて…　40人だ。

まずい！何が残っている？

あとは5席…。

じゃんけんで負けた3人と僕とやる気のなさそうな篤希の5人だ。
秀太は早くに、室長に立候補して今は寝ている。

本当なら、室長と副室長で司会をやるのだが、副室長に任せっぱなしのようらしい。

そのときの…というか今もだが…副室長が　水月さんだ。

僕はすぐさま残りの席を見た。

体育委員、保健委員、黒板係り×2、花のみずやり（珍しい仕事だ）どれも、辛そうだったり面倒くさそうな仕事だ。

「私達、2人で黒板係りやりますー！」

僕は声のするほうを振り返った。

仲の良い二人組の女子が、まず黒板係りへと立候補。

僕は、このままスルーした。

二人組で立候補しているのに、割り込めるはずがない。

「じゃあ、後3人ですね」

水月さんがにこつと微笑んだ。

残り3つ　！

篤希がどうする？と言わんばかりに僕のほうを見つめてきた。

ここは決まっている。

地味だが、恐らくは楽そうな“花のみずやり”だ！

僕は篤希に軽くウインクしてから、勢いよく挙手して言った。

「花のみずやりやります！」

しかし、ここで事件が起こってしまった。

ここで、何故かみんなの視線があと残っていた一人の女の子のもとへと集められる。

なにか、顔を真っ赤にして手を半分上げた状態にいる。よく見ると目が潤んでいる。

そういえば、この子はクラスでもおとなしい子だった。

「ねえ、あんた！今、この子が立候補しようとしてたのに割り込むなんてひどいんじゃない？」

クラスの女子の一人が言った。周りのみんなも僕をいっせいに見つ

めてきた。

ただ、秀太は眠っていて、又篤希は笑うのをこらえているような顔だった。

僕はわきの下に冷や汗をかいていた。

やばい…！どうする…？

決まっているだろう、葉夏蒼！女の子を泣かせていいはずあるまい！

「じゃあ、じゃんけんでいいですか？」

水月さんが、僕と泣いている女子を交互に見た。

「あ…間違えました！体育委員に立候補しようとしてたんですけど…！寝ぼけてたみたいです！」

と、一気にそういった。

「そう…じゃあ体育委員ね、篤希くんは保健委員でいいかな？」

水月さんは、またにつこり微笑んでいた。

「あ、ああ」

と、篤希も慌てていった。

みんなはシーンとして、それ以上何も言わなかった。

休み時間になり、篤希がからかいにきたがあまり覚えてない。

僕はあの笑顔で、あのさり気ない優しさで、“水月さん”を好きになった。

僕の意識は現実に戻り、部屋の天井を見つめていた。

今日のお祭りで、水月さんも来るだろうか？

来るだろう。なんせ大きなお祭りだ、町外からも人が来るぐらいだから。

会えるかな？会いたいな。会えるよ。

僕の願望は期待へと変わっていったが、やはりそんな良い偶然はないと頭の隅から突込みが入った。

「これじゃあ、昨日の秀太のことも笑えないよな…」

僕は、昨日秀太が駅であった子にひとめぼれした話を思い出した。そして、力なく苦笑した。

「会いたいよ…」

第3章 悠久の白きに包まれて

ふつと目を開けた。

いつの間にか眠ってしまったらしい。

僕は時計を見た。針は、10時をさしていた。

窓の外では、セミの鳴き声がやんでいた。それでも夏休み特有というべきか、子供の声が聞こえる。

「ああ、なんか時間の無駄しちゃったな」

僕は自分に笑いを入れながらゆっくりと起き上がっていた。

水月さんのこと、あんなに思ってたのは夢だったのかな…？

なんか、痛い胸が苦しくなった記憶がある。

ベッドに寝転がったときからすでに眠っていたのかもしれない。

風が絶え間なく吹き込んでくるため、カーテンが容赦なく舞い上がる。

「お茶でも飲もう」

僕は、階段を下りていった。

お茶をコップに入れて、口元まで持っていこうとしたとき、夏休みの空気を冷たい機械音が破った。

トウルトウルトウル…！

電話が鳴っている。

僕はコップをテーブルに置き居間へ向かった。

トウルトウルトウル…！

「分かってるよ、そんなに鳴らなくても」

と、小言を言ってから受話器を取った。

「もしもし…」

「お、蒼？」

「秀太？どうしたの？」

「いやさ、夏休みの初日だし、祭りまで時間あるから遊びに行かね

？」

ああ、なるほど。それはいい考えだ。祭りまで遊んでれば、少しはこの正体不明の苦しみから晴れるだろう。

僕はそう思ってた返答した。

「ああ、いいね！今からかな？」

「んー、今10時回ったところだろ？11時にお前の家に篤希と行くよ。いいだろ？」

「了解！待ってるよ！」

「おう！」

そういつて、お互いに電源を切った。

うん！夏休みなんだよ！何も変なことを考える必要はないさ。思いっきり楽しもう！

もともと、僕は恋愛とは無関係だったじゃないか。今更、何を苦しむ必要がある？

昨日の二人と話してて、少し興奮して調子に乗ってただけさ。さ、2人が来るまでに用意して、お母さんにメモ残しとかなきやな。何の服を着ていこう？

おしやれしていこう。今日は3人で楽しむんだ！

僕はそう自分に言い聞かせて、居間を出た。

「よし！これでお母さんも分かるだろう」

僕は自分で書いたお母さんへのメモに納得した。

“お母さんへ ちょっと、友達と遊びに行つてきます

そのまま、お祭りに行くと思うので帰りは遅くなります 蒼”

「そろそろかな…」

時計を見ると11時を5分ほど回っていた。

僕は用意もして、着替えも終わり二人を待つばかりだった。ピンポン！

お！うわさをすれば何とやらだ。
僕は、早走りで玄関へ向かった。

「おはよう！元気だったか？」

「おい、秀太、元気だったかって昨日会ったばかりだろ！」
篤希の素早い突っ込みに、秀太はまた口を“あ”と開けた。

「ははっ！秀太らしいよ。それより今日はどこに行くの？」

「ああ、俺と秀太で話してただけど、まだ祭りまで時間があるだろ？ほら、新しくできたショッピングモール、“紫陽花ブライト”はどうかな？」

「なるほど！あそこは僕も行ったことはなかったよ！行こうよ！」

僕達は自転車を駆けて街までの道のりを走った。

風がよりいっそう気持ちいい。まだ日差しもそれほどきつくなく地上を暖かに包んでくれている。

僕は“夏の色”をもういちど体感した。

「それにしても6月に完成したからって紫陽花はないよなあ……」

「お、秀太にしてはまともな事言うな。でも、あそこはカップルも多いし、年中“ジューンブライト”モードらしいぜ」

「へえ、それは凄いな……」

僕は、篤希の情報通に少し感心した。そんな年から年中よく恋愛ができるものだ。

「ま、今は夏休みだ。子供だって多いはずさ！」

篤希が、もつともなことを言った。

「はあ、意外に遠かったね」

「まあ、こんな大きなショッピングモールだ。これぐらいの範囲なら、許容範囲さ！」

秀太が笑っていった。秀太も体力はあるんだと、少し勉強になった。「ひとまず中に入ろうぜ？クーラーもきいているだろうしさ」

篤希が促したので、僕達は中へと入っていった。

「おお、涼しいな！クーラーガンガンじゃん！」

「そうかなあ…、僕は外の涼しさもいいと思うよ」

「そんなことはいいからさ、どこに行く？」

これから、僕が受けた夏の施しをじっくり話そうと思ったのにそんなこととけなされたので、僕は少しがっかりした。

それでも初めて入る店なので、僕も中を早く見たいことに変わりはないかった。

「ひとまず、ゲーセンじゃね？」

篤希も意見がないようだし、僕も目的が特にないのでひとまず賛同しておいた。

ゲームセンターは、やっぱり子供達が多かった。

中高生はもちろん、小学生も何人かいる。やはり、夏休みのゲームセンターは子供達にとって特別な存在なのだろう。

「二人とも何やる？」

「ん、やっぱり格ゲーだな、篤希やらねえ？」

「いいぜ、俺に勝てるかなあ」

二人は、アーケードゲームのほうに歩いていった。

僕が提案したのに、なんで二人で盛り上がるんだよっ！

僕は心の中でそう言って、二人の後を追った。

第4章 風翠の夢に流されば（前書き）

更新、限りなく遅いです><；
ごめんなさい。

それでも、今日からは頑張ります。

第4章 風翠の夢に流されば

「それっ、ここでコンボ！で…トドメ！」
ぴこぴこーん！

「あー、やられちゃったよ…。篤希強すぎだわ」

広いゲームセンターで、秀太の抑揚のない声で呟いた。

「秀太が弱すぎるのでは？」

篤希が、見下すように言った。

「くうく、おい蒼！俺とやろうぜ？」

「ええ！？僕？」

「逃げるなよ？ほらほら、向こう行って」

秀太に促されて、僕はゲーム機の向かいに行った。

どすっ…！

いすに腰を下ろすと、周りの空気が変わる。

ゲームセンター特有の空気、雑音が消える。

ここは聖地なんだな。

と、変に納得して僕は財布から100円を取り出した。

「おーい、いいか？」

「うん、お金入れるよ？」

秀太の問いに僕はそう言っ、お金をそっと入れた。

（勝てますように！）

と、無意味なお願いをして。

前半は秀太優勢だった。

慣れない格闘ゲームに、僕は秀太に攻撃を当てられない。

「それ、それっ！」

「ほいっ。蒼、ちゃんと当てろよ！」

秀太の挑発に、僕は顔を引き締める。

「くそっ！」

「ぼこ、ぼこぼこ！」

数発だがヒットした！

「おつ、ちよつとはやるようになってきたな」

秀太は、へへつと笑った。

人間は油断したときに足元をすくわれる事が多い。

それは、いつの時代でも同じだ。

秀太は 油断している…。

今が、チャンスだ！

「ふう…終わったあ！」

「秀太、ぎりぎりだっただろ？次やったら、負けるんじゃないか？」

「な、なにを！いいか、次やったら、俺は“お前”に勝つぞ！」

「はいはい、頑張つてね」

二人の楽しそうな会話も、僕にはあまり楽しく聞こえない。

「負けたあ…」

惜しかったのに。自分でもそう思う。

最後には、攻撃もヒットしてきて、相手の攻撃パターンもわかるようになってきたのに…。

やはり、前半の差が厳しかった。

「まあさ、蒼もあんまりやったことなかったんだろ？しょうがないつて！」

篤希が、僕の肩に手をかける。こういうときは、篤希は優しい。

いつでも、人の気持ちを分かってくれる。

「はは、いつでも相手してやるよ」

こういうときでも、秀太は秀太だ。いつもと変わらない、お茶だけ調子で。

二人とも、僕にとっては大切な友達だ。ずっと、一緒だ。

だから、僕は思わなかった。

この二人との絆が、あんな形に変わってしまうとは。

「次はどうする？」

僕の呼びかけにみんながうーんと、唸っていると“その人たち”は現れた。

「あら、秀太君たちじゃん！こんにちは」

後ろから女性の声でしたので、僕はふつと振り返った。

そして、僕の口はあんぐりと開いてしまった。

水月さんたちだ…。水月さん他3人。いつものグループだ。

「おっ、奈緒か？久しぶりだな！」

「何言ってるの？まだ、夏休み入ったばかりだよ？」

そう言って奈緒たちはけらけら笑った。

それにしても、こんなところで会うとは…。

僕は一人、赤面した。

「ねえ、一緒にボウリングしようよ。」

しばらく談笑していた中、奈緒が口を開いた。

え…、僕はそう思った。

正直、ボウリング等スポーティなことは得意ではない。

水月さんがいる前で…。

「ねえ…、どうする？」

「いいんじゃない？俺らも何するか決めてないし」

僕のわずかな希望は、秀太に一蹴された。

「俺も賛成、おもしろそうじゃん」

篤希も、賛成。僕の付け入る隙はない。

「じゃ、決定ね。早速行こうよ」

気まずい…。いや、幸運だ。でも気まずい…。

あれから、僕らはそれぞれ1対1になって対話することになった。

秀太が奈緒と、篤希が鈴美と、…僕が水月さんと。菜緒は明るくおもしろい。秀太と、話も合うだろう。

鈴美は少し男の前では性格が変わるが、基本的に誰にでも好かれる性格、篤希が好むのも分かる。

でも…僕らは何だ？

うーん、どうしよう…？

「あのね…、葉月くん？今まで、なんのゲームやってたのかな？」

「え？ああ…格闘ゲームだよ」

いつもは、活発に話す水月さんの顔が紅潮する。それが何故か愛しい。

「あのね…、あ、おもしろかったかな？」

「うん、おもしろ…かったよ」

今の僕もきつと顔がりんごのように赤いに違いない。

いや、タバスコのほうが正しいか。

「あのね…蒼くんでも…いいかな？」

「うん、じゃあ僕も優菜さんで…、い、いいかな？」

途切れ途切れ、見てるほうが苦しくなる。今の僕の声はそんなものだろう。

ちらと水月さん、いや優菜さんを見た。

え…？という顔をしている。

「も、もちろんだよ。あのね、これからは…その、よろしくね」
赤面して話す彼女、赤面して話す僕。

二人の思いは …

第5章 闇の淵より生まれ出でて（前書き）

かなり、更新遅いですね！。
すいません、見てってください。

第5章 闇の淵より生まれ出でて

最悪だ…。

「おっし、ストライク！」

秀太の声と呼応して、菜緒がキャーと叫び、ぴよんぴよん飛び跳ねている。

「あいつ、やるなあ…。これでまた離されたぞ…」

「篤希くん！うちらも負けてらんないよ！」

「おう、俺に任せろ！」

と、盛り上がりを見せている。

何故こうなったかという話は30分前にさかのぼる。

「やつぱり、男子と女子が組んで3レーン使ってやろうぜ？」

秀太のこの問いかけに、僕と水月さんを除く3人は、賛成！と叫び勢いでペアまで決まってしまった。

で、もちろんさっき話してたペア。僕は水月さんとだ。

普通の人ならいいとこ見せようと張り切るところであろう。僕はいかんせんボーリングなどやったことがなく、いいところを見せるものもないのである。

そして肝心の点数は…、ガーターばかりで入れてない。

交代制なので水月さんが投げるときは点が入る。なんとも空しいものである。

「蒼くん、初めてだもんね、しょうがないよ」

ふわりと笑顔をかける水月さんに、僕の鼓動は早くなる。

しかし、嬉しさという感情はこみ上げてこない。逆に悔しさがこみ上げる。

情けない、情けない。秀太や篤希はあんなにできるじゃんか。僕にできないはずがない。

「今度は任せて」

僕は水月さんを見つめて微笑んだ。水月さんは心なしか頬を染めたように見える。

そんなことも気にせずに僕は、唇を結び前方を睨んだ。

10本のピン、一つ一つが僕に挑戦しているようにも見える。

僕はボールを後方へ振り上げた、そして…。

「残念だったね」

「ゴメンね、僕のせいで…」

簿記はうつむき加減に話した。

「え！？ 蒼くんは、途中から凄くよかったよ！そしたら、私が今度はミスってばっかりで…」

水月さんは顔を赤らめた。

「蒼！このまま、6人で祭りに行こうってことになったけどいいか？」

「優菜もいいよね？」

篤希と菜緒が僕たちに呼びかけた。

またも、事後承諾。僕に権利はないのだ。

「うん」と一言だけ言っておいた。

水月さんも、菜緒に向かって返答していた。

「じゃあ、早速行こうか！」

話がまとまったようなので秀太が合図をした。

僕は、緊張の連続で結構疲れていた。今日一日で、何回ドキドキしたか、分からない。

そう、このときの僕は知らなかった。
過去最大級のドキドキが、今日僕を襲うことを。

最終章 蒼き花こそ咲き乱るれ（前書き）

最終話です。

今までのご愛読有難うございました。

最終章 蒼き花こそ咲き乱るれ

すっかり夜も更けた。

そして、お祭りはすごい盛り上がりを見せている。

僕も、例年通り楽しんでた。

だが、ただ一つ、違うことがあった。

僕の隣に憧れの人がいることが。

「わあ、わたがし買おうよ！」

「ガキかよー、わたがしなんてさ」

篤希の皮肉に、なにと鈴美は怒っていた。
周りは笑い、いい雰囲気だ。

「水月さん、たこ焼きおいしいよ！」

僕は、たこ焼きをほおばりつつ水月さんに声をかけた。

「嫌……」

「え……？」

突然の一言に僕は動揺した。

「優菜って呼んでていたのに」

「あ、ああ、ゴメン……、優菜」

今度はしっかりと優菜と呼んだ。

優菜はは、へへつと子供のように笑った。その笑顔がいとおいしい。

僕は優菜さんとの距離が確実に近づいてることを感じた。

どっかーん！

和やかな空気を、無遠慮な爆音が破った。

「花火だ……」

僕は無意識に呟いた。

「ああ、やべっ！花火が始まる時間過ぎてるっ！早く堤防に行こうぜ！」

秀太は一気に言い切った。

ここでもいいじゃないかという反対を押し切って、秀太は堤防へ行きたいというので僕たちもぞろぞろと、堤防へ急いだ。

「やつぱり、ここで見るのは違うなあ」

秀太は、花火を見ながら感嘆の声を漏らした。

みんなも、うんうんと頷いている。

夏の夜空を彩る、虹色のヴェール…、感動しないわけがない。

そんな時、優菜がとことこと歩いてやってきた。

そして、耳元でそつと呟いた。

「ちよつと来て」と。

僕は誘われるままに堤防の端まで歩いた。

「ねえ、どうしたの？」

こらえ切れず、僕は聞いた。

「線香花火買ってきたの。二人でやらないかな？」

二人でやらないかな？

ふたりでやらないかな？

…！

みんながいる中、僕と二人で？

僕はしばらく啞然としていた。

「駄目…かな？」

優菜が、恥ずかしそうに聞いてきたので、僕は慌てて了承の返事をした。

ぱちぱち…。

もう大きな花火も終わり線香花火の輝きだけが、僕らを包んでいる。静寂な暗闇が永遠をあらわし、この小さな輝きが、切り開かれる未来をあらわしているよう。

僕は決意した。

「ねえ、優菜？」

優菜は、なあに？という顔で僕の顔を覗き込んでいる。

「この線香花火と大きな打ち上げ花火…。同じ花火だけど光り方も規模も全然違う。それは、僕たち人間の人生も一緒のようなものだと思う。でも大きな花火が線香花火より美しいという人もいれば、その逆もある。僕は線香花火みたいに生きたいと思うんだ。派手なことはしないでいいから、こうやって優菜と過ごせる時間を少しでも増やせばいいから…。だから…これからも僕と一緒にいてくれる？」

優菜はにこりと微笑んだ。

「線香花火買ってきたよー」

僕は、思い出から現実の世界に引き戻された。

「さ、一緒にやろう？」

もう、彼女に会って10年になる。このお祭りは、10年前からずっと変わらない。でも、僕たちは前に進んでいる。これからはずっと彼女の笑顔とやっていくだろう。

闇に輝く線香花火のように。

「おう！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7944a/>

線香花火　ひと夏の思い出

2010年10月9日04時12分発行